

こうぶ えいらく
洪武通宝・永楽通宝

織田信長の一推しコイン



出土遺跡 行橋市幸越遺跡

「洪武通宝」と「永楽通宝」は中国明朝で発行された銅銭です。明銭は日本で、皇朝十二銭以降の日本独自のコインである寛永通宝が発行される江戸時代初頭まで、古い宋銭などとともに流通していました。

明朝でも宋朝と同様に年号が替わるごとに銅銭が発行されていましたが、明朝は現在の日本と同じように、1人の皇帝の代には同じ元号（一世一元制）を用いていたのでコインの種類は少なく、日本では「洪武通宝」・「永楽通宝」以外には「宣徳通宝」・「弘治通宝」の2種類ほどしか見られません。反対に出土量は多く、「洪武通宝」と「永楽通宝」は渡来銭の出土量のベスト10の中に入ります。特に「永楽通宝」は東日本で好まれており、織田信長が旗印に用いたことで有名ですし、仙石秀久は織田信長から「永楽銭」の家紋を与えられたとされています。一方、「洪武通宝」は九州で多く出土します。織田信長が「永楽通宝」を旗頭にした理由についてははっきりしていませんが、信長の強さは農繁期でも戦える常備兵を作り上げたことにあり、その常備兵を銭で雇用していたことから、銭が信長軍のシンボルとなったといわれています。

下線の付く言葉の解説は裏面にあります



洪武通宝 ～九州で人気の明銭～

明

1368年初鑄 五ヶ山網取埋蔵銭出土量ランキング第2位



洪武通宝は裏面に多くの文字が入るコインです。

本資料の裏面の「浙」のように鑄造地が書かれる「紀地銭」があり、本品の「浙」は浙江省で作られたことを示しています。日本では大型銭が流通していなかったため1文銭以外は出土することはほとんどありませんが、1・2・3・5・10文の5サイズがあり、裏面には大きさに合わせて「一・二・三・五・十」と文数が書かれるもののほか、「一銭・二銭・三銭・五銭・一两」などの重さの単位が書かれた「紀重銭」があります。

九州では永楽通宝より人気がありました。

永楽通宝 ～織田信長の一押しコイン～

明

1403年初鑄 五ヶ山網取埋蔵銭出土量ランキング第1位



永楽通宝はデビュー当時、高品質でありながら人気がありませんでした。

理由には、明国内で使われていなかったため「明の正式通貨でない」と考えられたという説や、古い宋銭に慣れていたのでピカピカの新しい銭をニセ金（模鑄銭）と考えたという説、宋銭よりも1回り大きかったためサイズが揃わず重いため使い勝手が悪かったなどの説が考えられています。

しかし、古い宋銭が擦り切れたり破損したものが多くなっていたことから、使われ始めるようになると人気が高まり、特に東日本で人気が高まり、16世紀後半には永楽通宝1枚は鏹銭（不良品や劣化したコイン）4文分の価値で取引されました。



模鑄（コピー）を繰り返して小さく、文字が見えなくなった鏹銭

参考文献：福岡県教育委員会 2001「Ⅲ. 調査の内容 2. 幸越遺跡」『農林漁業用揮発油税源見替農免農道関係埋蔵文化財調査報告』福岡県文化財調査報告書第159集

写真：本館撮影

朝鮮通宝

ハングルを作った世宗大王が発行したコイン



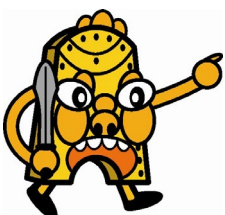
出土遺跡 なかがわしごかやまあみとり 那珂川市 五ヶ山網取 遺跡

ハングル文字を制定したことで知られる李氏朝鮮第4代 セジョン 世宗が1425年に発行した李氏朝鮮時代最初のコインです。

最初に鑄造されたコインは かいしよ 楷書体で、1633年に「常平通宝」が發行される際に はっぶん 八分書体（かいしよ 楷書体に近い れいしよ 隷書体）で再度鑄造されましたが、このコインは日本ではほとんど出土しません。

朝鮮半島では、それまでもコインが鑄造されたことがありますが、発行数が少なく、需要も少なかったため貨幣経済は浸透せず、米や布の物々交換が続いていました。世宗は貨幣経済の浸透を試みて発行しましたが発行量が少なく、信用が得られなかったので一部でしか使われませんでした。

朝鮮は1417年から海禁策をとっていたため貿易が制限され、交易量が少なく、海賊（わこウ 倭寇）が活発に活動したり、豊臣秀吉の朝鮮出兵が起こるなど、日朝交易が困難な時代であったので、日本で出土する量もごくわずかです。



下線の付く言葉の解説は裏面にあります

2-4 お金も輸入！？中国・朝鮮製の貨幣

②

李氏朝鮮の貨幣経済

世宗^{セジョン}は朝鮮通宝のほかに1401年に楮^{コウゾ}で作られた紙で作成された紙幣「楮貨^{チュカ}」を発行し、鑄造量が少なかった朝鮮通宝とともに貨幣経済の浸透に努めましたが、貨幣政策が安定しなかったため信用が築けず、数十年で使われなくなりました。

李氏朝鮮時代初期は農本思想に基づく経済政策をとっていたので、商工業は官僚や貴族階級、官庁で使う程度にしか発展しておらず、ソウルと平壤以外は自給自足的経済と物々交換が行われていたので、コイン自体が必要とされていませんでした。

一方、この頃の日本も同じように独自のコインを発行していませんでしたが、中国銭を大量輸入して貨幣経済を浸透させることに成功しており、1429年来日した朝鮮通信使は、日本の貨幣経済を見て、「銭が盛んに用いられ、布や米による支払いを凌駕^{りょうが}している。だから、千里の旅をするものであってもただ銭貨を帯びるだけでよく、穀物を携帯しなくてよい」と報告しています。

朝鮮では貨幣の材料である銅を日本から輸入しましたが、海賊（倭寇）の活動や豊臣秀吉の朝鮮出兵のために安定して銅を輸入できず貨幣が造れない状態が続いていました。日本が江戸時代に入ってようやく交易が安定すると、仁祖は1633年に「常平通宝^{じょうへいつうほう}」を発行し、貨幣経済の流通を促そうとしましたが、今度は後金・清との戦争（丁卯胡乱^{ていぼうごらん}・丙子胡乱^{へいしごらん}）が起こり、経済が混乱して思うように進みませんでした。そのため、朝鮮で貨幣経済が浸透するのは、胡乱後の混乱を立て直した肅宗が1678年に十分な量の「常平通宝」を発行してからになります。



楷書体



八分書体

参考文献：福岡県教育委員会 2013『五ヶ山 I』福岡県文化財調査報告書第 237 集

写真：本館撮影